

千葉の写真家田中さん パラオ海底の沈没艦船・航空機撮影

恐怖の後 敬虔な心宿る

呉・大和ミュージアムで18日から個展

千葉県市川市の写真家田中正文さん(47)は、二〇〇二年からパラオの海底で戦時中沈没した艦船・航空機の撮影に挑戦してきた。総潜水時間は二百六十時間に及び、その集大成として写真展「パラオ・海底に眠る証言者たち」を呉市の大和ミュージアムで開く。田中さんは「戦没艦船」の中に入っている間、ある種の感覚と向き合う。それは恐怖であり畏怖です」と語る。(佐田尾信作)

潜りながら自問自答

田中さんは一九八〇年代に沈没艦船の海に潜った。機約百五十機が陸上や洋上からさんご礁や海の「痛」が、今のテーマで撮影する。でついえた。田中さんが水もなき船だった。四隻の「よし」の風景を撮ってきた。きっかけ。「観光客も私も二〇〇二年、パラオのレメポートで通り過ぎていた足元がサウ大統領夫妻とともり、知らなかったことを取

中撮影に成功した艦船は「明石」なる作戦支援に従事する海軍特務艦三隻、あまつ丸など陸・海軍の民間徴用船十隻に加えて船名不明の四隻。水没した零式艦上戦闘機(七〇機)、零式水上偵察機計六機もとらえている。



旧海軍の重要拠点だったパラオは一九四四年三月三十、三十一日の二日間、米軍の大空襲を受けて艦船五、六十隻が沈没し、航空

うち重ねたヘルメットののをしたためている。残骸が見つかった通称「ヘルメット・レック」(沈没船の内部では水中「轟」は砲撃音が聞こえ、恐怖に襲われるという。二、十代のころ「自分探し」のありと浮かび上がる」と田中さん。また、航路標識六番「アイ近くに沈む通称「フイ6レック」は徴用されたカツオ漁船とみられ、船首の左右に今も放水設備が張り出していた。

沈没艦船の内部に入るのは最も危険な潜水活動。丙配が一度舞い上がるとたちまち視界ゼロになり、さまざまな障害物があり、時には不発弾もある。パラオの沈没艦船の平均水深は三、五メートルあり、田中さんは英国海軍が使う特殊な装備で潜る。携行するノートパソコンには常に「遺書」



水深12メートルのさんご礁の上に座す零式水上偵察機＝パラオ・アラカバサン島沖(2006年撮影)

写真展「パラオ・海底に眠る証言者たち」は十八日から四月九日まで(火曜休館)。入場無料。写真五十八枚をパネル展示し、約三百枚を常時スライド上映する。



「自分は本気なのか、自問自答しながら潜ってきた」と語る田中さん



特務艦「石廊(いろう)」の艦首正面＝パラオ・ウルクターブル島沖(2004年撮影)

沈没艦船の内部に入るのは最も危険な潜水活動。丙配が一度舞い上がるとたちまち視界ゼロになり、さまざまな障害物があり、時には不発弾もある。パラオの沈没艦船の平均水深は三、五メートルあり、田中さんは英国海軍が使う特殊な装備で潜る。携行するノートパソコンには常に「遺書」

沈没艦船の内部に入るのは最も危険な潜水活動。丙配が一度舞い上がるとたちまち視界ゼロになり、さまざまな障害物があり、時には不発弾もある。パラオの沈没艦船の平均水深は三、五メートルあり、田中さんは英国海軍が使う特殊な装備で潜る。携行するノートパソコンには常に「遺書」